

	<h1 style="color: red;">パソコン事始め</h1> <p style="color: red;">SCE・Net 小松昭英</p>	<p style="color: red;">E-78</p> <p style="color: red;">2015/7/28</p>
---	--	--

私のパソコン人生は、当時世界初と言われていた東芝のラップトップコンピュータで始まった。1987 春に購入申し込みをした。多分国内販売開始直後だったと思う。Wikipediaによると、海外では 1985 年から発売されていたとのことである。ところが、その直後に東芝機械コム違反事件が起こった。東芝機械が偽って輸出した「同時九軸制御可能な高性能フライス盤」が、ソ連が潜水艦の探知、識別、追跡の手がかりとなるスクリー音を小さくするのに役立ったと言うのである。しかし、米国は東芝本体に制裁を加えることはしないであろうと報道されていた。何故なら、国防省が東芝のラップトップコンピュータが欲しいからと言うのである。同じく Wikipedia によると、実態はそんなことではなかったようであるが、納期が突然長くなったと報じられていた。とにかく東芝のラップトップの人気を刺激したこと自体は間違いなかったようであった。

しかし、わたくしの場合は、幸か不幸か、この事件が報じられる前に購入申し込みをしていたので、納期に影響はなかった。早速会社の共済会から、3 年払いで 36 万円借りて憧れのパソコンを手にすることができた。手にしたパソコンは、フロッピーディスクの挿入口が二つあり、一つには「一太郎」などのソフトウェアを収めたディスクを挿入し、もう一つには作業用を入れるという、今では考えられないような代物ものであった。しかも、もうすっかり忘れていたが、重量は 4kg もあったようである。それでも、喜んで海外出張の際には持って行ったものである。

このパソコンについて、今でも忘れられないことがある。それは、英文のワープロ、確か WordStar といったと思うが、キーを叩くと、いきなり「どのキーを叩いても爆発することはありません」というチュートリアルと爆発を想像させる線図が表れたことである。さらに、パソコン通信をしようとしたときこの WordStar に痛い目があるが、これは順を追って後述することにする。そして、暫くすると、ハードディスクを装備したラップトップが発売された。「早まった」と思ったが、後の祭りであった。

そして、パソコンを手にした年か次の年だったと思うが、学会の経営システム研究委員会に関わることになり、ある大手石油会社の中央研究所の所長さんに、研究所見学をお願いするファクスを送ったところ、「シミ」のない綺麗なファクスが送られてきた。驚いて調べると、パソコンファクスであることが分かった。多分、誰かに教えてもらったのだと思うが、返信はパソコンメールでしたと思う。

そして、いざ研究所を訪問すると、驚いたことに、所内の事務処理はすべてパソコンで処理されているばかりでなく、会議用資料はアップロードして置き参加者全員が事前に目

を通すことや、さらに実験記録も正式な報告書は勿論のことメモ類もすべてアップロードしておくことが義務付けられているとのことであった。確か IBM の手順にしたがって企画しているうちに、このようなシステムを導入することになったと聞いたような気がする。昨年、小保方事件が発覚し、当初倫理問題として報道されたとき違和感を持った。それは、四半世紀前のこの研究所のことを思い出し、瞬間的に倫理問題と言うよりはマネジメントの問題だと考えたからだと思う。

ついでに、記憶に残っている研究所管理について述べると、次期研究予算を前期末に申請するというような時間の無駄を排除するために、何時でも申請し認可してもらう制度になっていると言うのである。そして、認可されたのはいいが、所要人員などを融通できないときは、所長として最も辛いことではあるが、進行中の開発研究を中止せざるを得なくなるというのである。どうしてそのような制度にしているのかというと、どこもかしこも同じような研究をしているという状況のなかでは、一刻も早く特許申請することが至上命令だからと言うのである。上述のパソコンシステム、今で言う情報システムの導入も、その手段の一つだったのである。

そして、前述の研究委員会に関連して、活動内容を決めるのに、AIChE (American Institute of Chemical Engineers) のマネジメント部会を参考にしようと、部会長に会うべくヒューストン支社に依頼して、1990 年の夏季大会が開催されていたサンジェゴで、会うことにしてもらった。そして、ユニオンカーバイト出身の部会長と意気投合して、翌年開催予定のロスアンゼルスでジョイントセッションを持つということになり、秋の大会で併催されるマネジメント部会に正式に提案することになった。そして、予定通り提案し正式に承認された。この会議での次の議題が PC メールを部会の連絡手段に使うことの是非についてのものであったが、年配者から反対意見が出た。絵も簡単に送れるファクスでいいのではないかというものであった。これが、1990 年の米国の学会での実態であった。今から思うと、よくぞこんな場面に遭遇できたものだと感慨深いものがある。なお、余談であるが、結局東レ伊藤昌寿社長とカネカ館糾社長に参加していただいて、両学会にとって最後で最後のジョイントセッションⁱを無事終えることになった。

と言うようなことから、以後先方の議長との連絡は PC メールでせざるを得なくなった。ところが、前述の WordStar を使ってメールを送ろうとしても、何故か発信できないのである。対策が分かるのに約一週間かかった。結局、原因は分からなかったが、何故か文章の後にスペースが取られるのである。エディターでこの意味のないスペースを削除すると発信できたのである。それに NIFTY-Serve から CompuServe/MCI (米国長距離電話大手) を経由しなければならなかった。初めてメールが発信されたとき、何かが暗闇の中を走っているようで、感激したのを覚えている。なお、当時 NIFTY-Serve はヨーロッパには拠点がなく、英国のマンチェスターの ICI (Imperial Chemical Industries) 向けに発信するに

ⁱ 厳密にいうと、このセッションの前に、AIChE の国際部会とのジョイントセッションが東工大大島榮次教授により開催されていた。ただし、国内部会とのものではなかった。

は、さらに MCI 経由で国際通信しなければならなかった。今や、如何に便利な世の中になったものだと感慨深いものがある。

この PC メールが使えるようになってから、この重いラップトップコンピュータを海外出張に持参するようになった。当時は携帯用プリンターがなかったので、ホテルで文書を作って東京経由でホテルに PC メールで送ればプリントアウトできたからである。

そうこうしているうちに、1989 年に世界初の A4 ファイルサイズのノートパソコンが東芝から発売されたが、当初はハードディスク付ではなかった。ラップトップの場合、暫くしてハードディスク付が発売されて悔しい思いをしたので、ハードディスク付になるまで待つて購入した。重量は 3 分の 2 になり 2.7kg になった。そして、プリンターも携帯用が発売され、ノート型 PC と携帯型プリンターの両方を持って出張するようになっていった。

そして、運命の悪戯か、1991 年 4 月から急遽某地方私立大学の経営情報学科の先生になり、翌年経営情報学会が設立され、さらに次の 1993 年にその東海支部を設立することになり、30 名弱の一つの研究会の幹事役を務めることになった。この時 PC メールファクスが威力を発揮することになった。そして、それを知って、ある自動車会社の研究所員が PC メールで参加してきた。また、ある短大の先生は自分の大学にファクスがあるのかどうか分からないと言っていたが、電子計算機室にあるのを見つけたとして、全員連絡が取れることになった。研究会の場所を新幹線の駅から徒歩数分のところに確保したこともあったと思うが、比較的盛会のうちに推移し、PC メール利用者が増えていった。

そして、インターネットが 1995 年半ばではあったが使えるようになり、暫く経って全員が電子メールが使えるようになっていった。初めて、近所の大学の若い先生に教わってメールを発信し、返事を受信したときの嬉しかったことを今でも覚えている。残念ながら、相手方の先生の名前は忘れてしまったが。

この大学に勤務中の 1998 年に、上述の経営情報学会の秋季大会を開催することになるのであるが、衛星通信設備を持った新館完成の柿（こけら）落としも兼ねることになり、学会としては最初で最後になるのであるが、東北から九州にわたって、12 大学 5 高専を衛星通信で結ぶことになった。そして、基調講演を衛星通信教育の大御所の筆者の母校の先生に、もう一人我が国を代表する自動車メーカーの副社長に、お願いすることになった。衛星通信でこちらの様子を先方に、先方の様子をこちらで、当然のことではあるがリアルタイムで、目にすることができるのである。さらに、移動カメラを一台用意したので、リハーサルでどのような場所からどのような場所を移動して映すかも検討した。しかし、結論として、移動カメラは移動せず、固定カメラとして扱うことにした。

そして、我が母校の先生の第一声、女子教育大学の参加者に対する「美人が多いですね、何時かお伺いしたいですね。」という呼びかけと「どうぞ、お待ちしております」という挨拶の交換から始まった。この挨拶の交換が全 17 会場の緊張していた雰囲気を一変させた。あらためて映像の持つ力とそのリアルタイム性の凄さに驚くとともに、衛星通信の成功を見届けて一安心した。前日から設備の調整をしてもらいながら悪天候にならないことを祈っ

ていたからである。比較すること自体無理な話かもしれないが、最近の Skype の手軽さとその信頼性を考えると天と地ぐらいの差があったと言えよう。

そして大学生生活 10 年で、定年になり退職した。この退職後暫くして、まずは現役時代の親しい部下、次いで高校の同期生、地元の研究会、そしてある学会と、その Yahoo メーリングリストに関わるようになっていった。ところが、今年このメーリングリストサービスが停止された。そこで、グーグルの同種のサービスに切り替えたが、筆者が所属していた他のグループの幾つかはサイボウズ Live（グループウェア、クラウド型コラボレーションツール）に切り替えた。調べてみると、今や、わが国ではグループウェアとしてはトップのシェアを維持しているという。

さらに、縁があって、関係者に聞いてみると、サイボウズという企業は、IT という分野に特化しているということと無関係ではないと思うが、「兼業自由、退職・再就職自由」というのである。考えてみると、ソフトウェア開発をするにはプロジェクト編成が必須であり、そうなる通常と通常の運営をする限り、プロジェクトに従事する所要要員数の変動が激しいはずである。そう考えると、「兼業自由、退職・再就職自由」というのは、少なくとも企業にとっては合理的な「仕組み」なのではなかろうか。

一方、従業員にとっても、もしこの「仕組み」を利用する気持ちがある限り、もう一つの全く別のやりたいこと、あるいは当該企業内ではできないキャリアアップになることが経験できることになるはずである。そして、そのような従業員と一種のエコシステムを形成できるならば、企業を成長させる人的資源を経済的な負担なしに確保していくことが可能になるのではなかろうか。

となると、個人の仮想作業空間¹も、今までと違ったものにならなければならないはずである。そして、その兆しがパソコンの世界に起こっている。それは、Windows8.1 から標準装備されている OneDrive アプリケーションである。これは、オンラインストレージサービスで、様々な端末間のファイルの共用、あるいは複数人によるファイルの共用や同時編集などができ、ビジネスパーソンが仕事で活用することを前提にしているものであると言われている。

そして、今ドイツが第 4 次産業革命を起こそうとしている。これは当然第 1 次産業革命がそうであったように、「仕事のあり方」も変えることになるのではなかろうか。リンダ・グラットン²が言う「ワークシフト」が起ころうとしているのではなかろうか。すなわち、あらたな「パソコン事始め」が起ころうとしているのではなかろうか。

文献

¹ Pruitt, S., & Barrett, T., Corporate Virtual Workplace, Cyberspace: First Steps, edited by Benedict, M., MIT, 1991

(NTT ヒューマンインターフェース研究所訳、企業用仮想作業空間、サイバースペース、pp.386-410, NTT 出版、1994)

² Gratton, L., The Shift by Lynda Gratton, 2011 (池村千秋訳、ワークシフト、プレジデント社、2012)